



# 大学通い生徒受講

## 筑波高 筑波学院大と協定

20年9月開始

高校生が大学に「通学」。地域に貢献する人材育成などを狙いに、つくば市の県立筑波高（同市北条、国府田稔校長）と筑波学院大（同市吾妻、大島慎子学長）が8月29日、同大キャンパス内で「連携協定」を結んだ。高校生が大学へ出向き、同大の講義を約1年間受講する高大連携事業などに取り組む。

### 地域貢献の人材育成

受講スタートは2020年9月の予定。「高校生の大学講義受講」が中心。「社会に役立つ若者を育てる」という理念が一致することなどから、筑波高から申し入れた。受講対象となるのは来春、筑波高へ入学する新1年生から。来春入学の生徒が2年に進級する再来年9月から約1年間、同大キャンパスへ通い、講義を受ける。毎週金曜の午後に約30〜40人が通う予定で、講義は大学生とは別に実施され、高校生向けにアレンジした内容になる予定。同高によると、高校生が大学キャンパスへ通い、継続的に講義を受ける取り組みは本県では初という。

市吾妻

連携協定を締結した筑波高の国府田稔校長（左）と筑波学院大の大島慎子学長（右）は

職業実習したりする2、3年生対象の独自教科「つくばね学」を実践している。地域と関わることで生徒の人間力を養う取り組みで、16年度から近隣事業所での職業実習を通し、生徒の社会性や地域への関心を高めてきた。

現在の受け入れ先は、付近の小学校や老人ホームなど計18カ所。今後、同大が受け入れ先に加わる。今回の連携による講義受講は「つくばね学」の講座の一つで、講義を受けた生徒の高校の卒業単位になる。同大にはビジネスマネジメント、グローバルコミュニケーション、情報デザイン、メディアデザインの4系統のコースがあり、来年度から地域デザイン系の新コースが加わる。高校生らは、約1年間の講義の中で、同大の5分野の講義を受ける予定。

同高の国府田校長は「5つの専門的な分野の講義を受けることで、生徒が知識を深め、将来の進路選択の幅を広げることができる」と期待を寄せた。協定は来年3月まで。以降は1年ごとに更新する。

（高阿田総司）